



## 「北極読本—歴史から自然科学、国際関係まで—」

南極 OB 会編集委員会 編  
成山堂書店, 2015年10月  
220頁, 3,000円 (本体価格)  
ISBN 978-4-425-94841-3

本書は渡辺興亜氏を編集委員長として24名の執筆者による北極の自然科学から人文社会科学まで、広い分野についての解説書である。あとがきには先に出版した「南極読本」が好評とのことなので、その対になる「北極版」の出版を出版社から勧められたことに始まるとある。このため、南極 OB 会を中心とした編集委員会によって出版が企画された。実際、執筆者の中には南極関係者が多く、極域研究者は両極をフィールドとしている場合が多いのも事実である。また、執筆者は研究者ばかりではなく、元新聞記者、探検家などの顔ぶれも含まれ、広範囲の視点から書かれている。さて、いまなぜ北極かと考えると、これには理由がある。地球温暖化の影響が北極で顕著に現れているからである。北極海の海水の融解やグリーンランド氷床の質量損失、陸域北極圏の環境変動など、北極域では急激な変化が起こっている。これに対して文部科学省の GRENE 北極気候変動研究事業が2011年より開始され、多くの研究者が北極で活動する時期と重なったことが本書の出版を後押ししたと思われる。

本書の構成は北極地域の概説、地理、氷床の現在と過去、グリーンランド氷床の雪氷学、気候、気象・水象、永久凍土、北極海と海水域、地質構造、地球物理観測、生物、探検史、北極海航路、民族の歴史と分布の全14章から構成される。それぞれの分野の専門家によって歴史的な背景も踏まえ、最新の研究成果まで分かり易く解説されている。北極の文献を読む際に専門でない人が時々馴染みにくい印象を持つことがある。それは人名と地名表記の問題である。これらが章毎に統一されていないと読みにくい。本書は意識的にその統一がなされている。また、地図や写真を多用し、土地勘のない人でも理解しやすいように工夫されている。本書は第1章で北極圏、北極帯、北極域などの用語の解説があり、また、北極域の気候特性や古気候に関して簡単に紹介されているので、これから北極を学ぼうという人には分かりやすい。もう少し詳しい気象

に関する説明は、あとの気候、気象・水象の章に解説されている。私自身は北極探検の歴史に関心があったので、12章「北極探検史」は非常に興味深く読んだ。その中で述べられている「中世の温暖期」とバイキングが活動した時代に関する記述は一般的に知られていることではあるが、その後の北極探検に大きな困難が伴ったことと小氷期の関係などにも思いを巡らせると、心揺すぶられるものがある。さらに、13章「北極海航路」で述べられている近年の海水勢力の減退と北極海航路の開拓に関しても、気候変動と人間活動が大きく関係していることを物語っている。そのような観点で本書を改めて見直してみると、自然科学と人文社会科学を同時に捉えることの重要性に気付かされる。

本書の特徴は各章の最後に、「コラム」が設けられていることである。コラムには各章で出てきたキーワードや人物、トピックスについて2-3ページの解説が書かれている。例えば、コラム4「国際極年」では、最初の国際極年 (IPY) が1882-1883年に両極で開催され、日本が南極観測を開始する1957-1958年の国際地球観測年 (IGY) へ繋がっていった経緯が解説されている。コラム8「世界最北の観測村、ニーオルスン」では、ノルウェーのスパールバル諸島スピッツベルゲン島の研究村ニーオルスンについての紹介が書かれている。このコラムは元読売新聞記者の田口章利氏が担当したもので、2013年に実際にニーオルスンを訪問し、そのときの取材に基づいた最新の村の様子も含まれている。11章「北極の生物」に続く、コラム12「元祖“ペンギン”は、北半球の鳥だった」では、“ペンギン”という名前が、最初北半球の“オオウミガラス”に付けられた名前前で、人間による乱獲で絶滅した歴史が語られている。最後のコラム16「世界最北の先住民集落、シオラパルク村」は、北極犬橇探検家の山崎哲秀氏の文章である。山崎氏は毎年秋の終わりに春にかけてカナダのレゾリュート村やグリーンランドのシオラパルク村に滞在し、北極海水域を犬橇で踏破するプロジェクトに取り組んでいる。その際、研究者のサンプルを採取したり、設営のサポートなども行い、北極研究者との付き合いも深い。その山崎氏がシオラパルク村の自然や人々の暮らしについて伝えている。そして、近年の急激な自然・社会環境変化によって、シオラパルク村が現在、廃村の危機にあることを懸念している。

本書は北極の自然と人間についての解説書であり、その分野をこれから学ぼうと言う学生にとっては入門

書である。また、北極についての読み物としても面白い。広い分野のことが書かれているので、自分の専門分野以外のことを知るための参考書としても価値ある一冊と言える。

(岡山大 青木輝夫)

---